

## 2) 微生物検査室の支援を通じ、感染症学・臨床微生物学の研究を発展させよう

獨協医科大学感染制御センター，感染制御・臨床検査医学講座

○吉田 敦

日常の感染症診療や感染制御活動を行っていく中で、研究（スタディ）につながる題材に気づきながらも、なかなかそれに踏みこんで行けないという気持ちを抱かれる方は多いと思います。また雑多な事象について個々の例で異なった対応を要する感染制御活動そのものが、研究につながりにくい印象を持たれることもあるでしょう。本来研究の比重が相対的に高い大学病院であっても、実地の感染制御とサイエンス（科学）の間には相当の距離があるようです。

感染症診療と感染制御活動の基礎には、微生物検査とそこから得られる微生物検出情報が必ず存在します。微生物検査を向上させれば、感染症診療はいうまでもなく感染制御活動の質も明らかに上がりますし、微生物検査の質が担保されなければ、感染制御そのものも容易に揺らいでしまいます。では微生物検査の質を保つにはどのようにしたらよいでしょうか；人材や機器は重要ですが、それ以上に“臨床状況を微生物検査へフィードバックすること”そして“臨床微生物学の視点から微生物をよく知る”ことが鍵になります。感染症診療ないし感染対策担当医師がこの点を十分配慮して検査室を引っ張っていけば、質の担保は容易になりますし、医師の良質な suggestion によって微生物検査は大きく変わっていくものです。

実際にも「患者情報に基づき、これまであまり用いらなかった方法を使ってみたら原因微生物が判明した」、「今まで（臨床的に疑いながらも）全く検出されてこなかった微生物が、技師さんと一緒によく吟味してみたらちょっとした工夫でよく判明するようになった」という体験をされたことがあると思います。このような検査室支援での出来事が、実は感染制御におけるサイエンスの部分でもあるのです。これを積み重ねていけば新しい知見になるでしょうし、新手法がさらに新しい発見にもつながっていきます。

感染制御における臨床微生物学的な側面に力を注ぐことで、日常の活動からサイエンスの部分が引き出せると考えます。これは将来、これまでの「基礎の微生物学」と「臨床感染症学」の二本立てというイメージを離れ、「感染症学、臨床微生物学、感染制御学」の統合的な理解へと発展する可能性を示しているといえないでしょうか。微生物とうまく共存する道を探っている我々に求められているのは、このような包括的な理解に基づいた現実的かつ効果的な対策や行動といえましょう。包括的な理解を深めるという目的の中で、感染制御とサイエンスの接点も考えられていくべきだと思います。